

肥 前 半 島 の 眼 鏡 橋

——長崎県波佐見町・世知原町を中心に——

隈 部 守*

I. はじめに

肥前半島は長崎・佐賀両県の半島部の総称で、広義に解すれば長崎県本土の全てが含まれるが、狭義には大村湾東部の多良火山帯を掩う玄武岩溶岩台地とメサ断層地塊からなる。本稿は、肥前半島に分布する眼鏡橋について、山村研究の視点から分析し、論じてみたい。

II. 波佐見町における眼鏡橋

(1) 窯業の盛んな盆地型山村

波佐見町は面積 55.7 km²、人口約1.5万で、波佐見盆地を地理的単位とする農業と窯業の盆地型山村である。波佐見盆地を流れる川棚川（波佐見川）は、四方の山地から大小30余りの支流を集め大村湾に注ぐ。本流の波佐見町内での流路は 14 km、支流は村木川 3.2 km、長野川 3.1 km で短小なものが多い。波佐見盆地に集まる水系、河谷は眼鏡橋にもつながりをもつ。

波佐見盆地を横断する道路は県道1号線で、佐世保から嬉野に通じ、盆地北部の山並を西九州自動車道が横切っている。川棚・有田両町を結ぶ南北にも、岩峠・東峠を越える県道があり、武雄へは仏坂越えて結ばれる。また、

河谷ルートが道路網に影響を与え、盆地のほぼ中央には波佐見往環の宿場地名がみられる。また、町の西部の山地に小門墳群があり、村木・皿山の地は窯業発祥の地である。

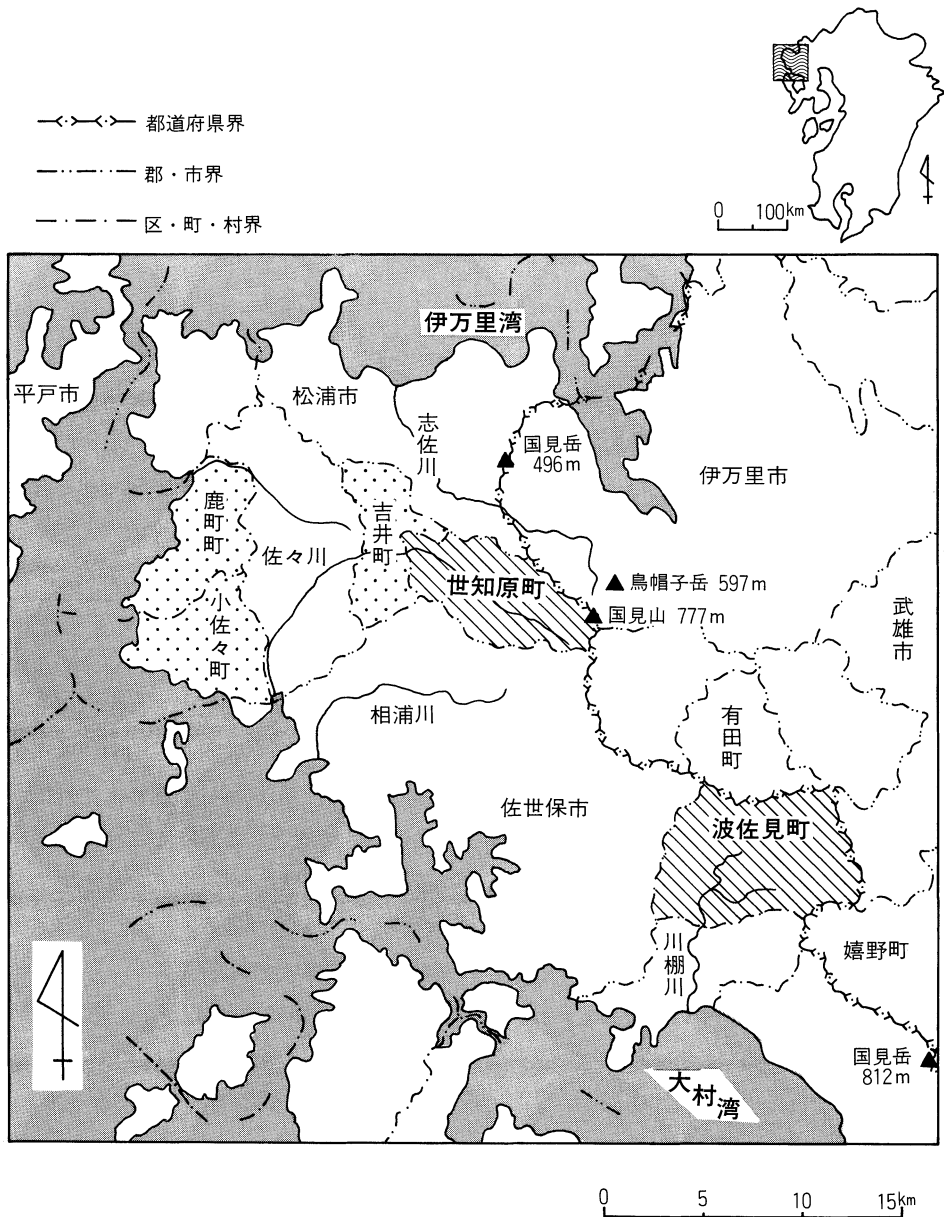
波佐見町のやきものは、19代大村喜前^{よしあき}が朝鮮人陶工季祐^{ゆうけい}慶らを伴い帰国し、慶長4年（1599）に窯業の基礎を築いた¹⁾。中尾集落一帯が窯業の中心となっている。ここは、波佐見盆地の南東部に位置し、中尾川上流の白岳（標高 331 m）は陶石の山で、原料産出と谷川の水利、山林からの燃料に便利で、波佐見焼の主産地として君臨してきた。近年交通条件のよい内海、西原宿という平地の集落に産地が移動しつつある。

(2) 眼鏡橋の分布と特質

波佐見盆地には橋が多く、昭和62年現在129を越える（波佐見町役場、橋梁現況調べ）。この中に眼鏡橋が含まれる（第2図）。眼鏡橋とは石造アーチ橋の通称で、一般には石橋²⁾で通用する。アーチが一つの橋も二つ以上の橋もあるが、波佐見町的眼鏡橋では稗ノ尾橋だけが二連で、ほかは一連である。稗ノ尾橋は長崎・諫早両市の眼鏡橋に似ているが、橋面は平坦で、橋脚部には段差がない。それは荷物運搬のことを考えてのためである。

波佐見町的眼鏡橋はその80%が川棚川上流の山間部の窯業地に存在する。また、波佐見

* 元島原高等学校教諭

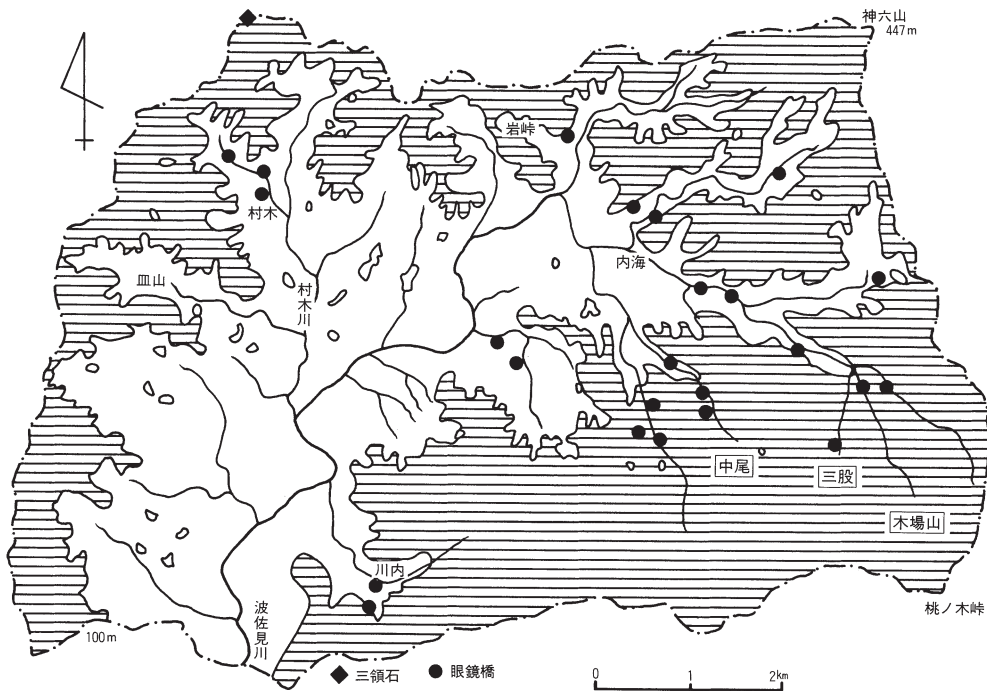


第1図 研究地域

町の眼鏡橋は比較的新しいが、それでも数十年を経過している。稗ノ尾橋は川棚川上流の小樽郷にあり、明治42年（1909）12月に完成した。昭和63年（1988）2月10日、町の文化財に指定され、波佐見町における眼鏡橋のシ

ンボルの存在である。

波佐見町には小さな川が多い。藩政時代には道路はあるが、川に橋が架けられることは少なかった³⁾。明治中期に馬車が登場し、陶石、陶土、焼物荷など重量物の運搬では、こ



第2図 波佐見町の眼鏡橋の分布

れに耐える石橋が必要になってきた。稗ノ尾橋も波佐見町における窯業発展の大動脈として建設されている。橋長 12 m、橋高 3.5 m、幅 3.7 m の稗ノ尾橋は、町道、県道の改修にともない、幹線ルートからはずれ、今日ではわずかに農道として使われるだけである。波佐見町的眼鏡橋は名前のつくものが25橋のうち4橋と少ない。橋名の推定可能なもの5橋を合わせてもそれは全体の36%に過ぎない。永尾郷の杉尾橋（1914年建設）、井石郷の籠原橋（1916）、小樽郷の中島橋（1919）・御堂橋（1921）、永尾郷の大正橋（1925）、湯無田郷の宮ノ前橋（1929）、金屋郷の智見寺橋（1935）がそれである。また、熊野神社門前橋は明治38年（1905）架設とみられる。

波佐見町には煉瓦造りの眼鏡橋がいくつかある。また、石と煉瓦を併用した眼鏡橋が、

全体の3分の1を占める。井石郷と湯無田郷を結ぶ橋長 8.7 m、橋高 4.2 m、幅 3.5 m の籠原橋はその例である（写真1）。

波佐見町的眼鏡橋は比較的小さい。25橋の平均の長さは 4.1 m で、同じく幅は 3.2 m である。熊野神社門前橋は幅 1.6 m、中尾集落内には長さ 1.5 m、幅 2 m という小規模な煉瓦造り眼鏡橋もある。なお、本地は地すべ



写真1 籠原橋（波佐見町）

り地であるため、上流部の眼鏡橋は長さは短くてよいが、土石流に襲われやすい。三股集落内の眼鏡橋はまったく用をなしておらず、地すべり地での眼鏡橋の保存は容易でない。

Ⅲ. 世知原町における眼鏡橋

(1) 炭鉱町としてさかえた里山型山村

世知原町は面積 31.8 km²、人口 5 千人未満の長崎県では数少ない山村地域である。

町の中心部を西に流れる佐々川は、長崎県で最も長い河川で、世知原町はその上流域に位置する。また、集落の背後には佐々川の谷を囲むように三方から山地が迫っている。これらの山地を刻む支流は山間部を流れ、急流でV字谷をなす。

町の中央部は海拔 150 m 前後であるが、200 m 以下の地は町域の 4 分の 1 に過ぎない。周囲は傾斜地で、第三紀層の基盤、さらに溶岩台地が広がり、玄武岩と第三紀層との不整合面は地すべりが起こりやすい。地すべりは佐々川右岸の念田（昭和26年）、北川内（同28年）、左岸の長田代（同28年、31年）で起こっている。その際長田代では 205 ha 余り、142戸が被害を受けた。

中心集落の栗迎には東西、南北の幹線道路が集まり、佐世保、松浦、伊万里に峠道を通じる。峠は 300 m 以上で、栗木峠は 634 m である。

本町の農業的土地利用として茶園が特徴的である。茶園は明治に開発され、昭和35年 60 ha、55年 114 ha と増加し、世知原茶の産地となっている。

佐々川の流域は一時期石炭採掘で活気を呈した。そのため世知原町には炭鉱事務所を利

用した歴史民族資料館がある。国見炭鉱として開発されたのが明治24年（1891）で、その後松浦炭鉱、飯野炭鉱と改称し、昭和45年（1970）3月10日の閉山まで約80年間続いた。昭和35年最盛期には 5 鉱を数え松浦炭鉱には鉱員1,356人、肥前炭鉱には342人が従事した。しかし、その後の炭鉱の閉山で人口の激減や鉄道の廃線など、世知原町の社会、経済環境は大きく変化している⁴⁾。

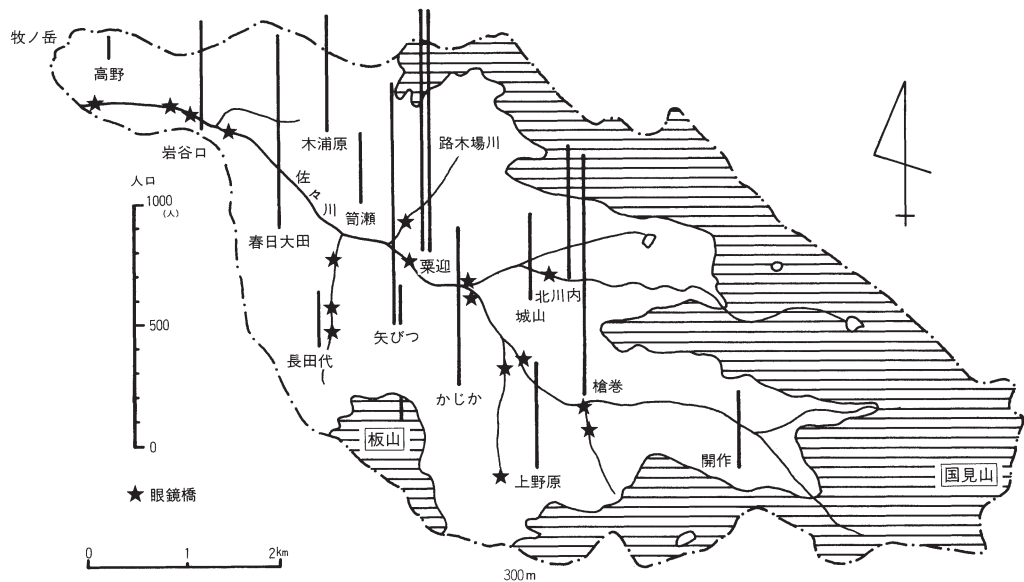
(2) 眼鏡橋の分布と特質

世知原町には眼鏡橋が17橋確認されている。それらは佐々川本流に 6 橋、支流に11橋ある（第3図）。

町内で最も古い尾崎橋の架橋は明治30年（1897）で、長さ 6.7 m、幅 3.6 m、高さ 9 m である。倉淵橋は長崎県で最大級的眼鏡橋である（写真2）。架橋は大正 8 年（1919）、標高 120 m の栗迎、矢櫃の集落を結ぶ佐々川本流に県道菰田線（佐世保～世知原～松浦）を通すため架けられた。橋の長さは 20.6 m、幅 4.6 m、高さ 8.1 m である。高観音寺橋は架橋記念碑で昭和 4 年とわかる。長さ 13.3 m、幅 3.9 m、高さ 6.4 m で田園風景にマッチしている。

栗迎、矢櫃を結ぶいずみ橋の架橋年はわからない。松浦炭鉱の頃、炭鉱住宅への通路となっていた。橋長 9 m、幅 2 m、橋高 7.9 m の規模であるが、現在は使用されていない。佐々川左岸の支流には、上ノ原免の^{かよいじ}通地橋、太田免の奥ノ口橋という使用不能の眼鏡橋がある。また、地すべり地では丈夫な眼鏡橋も崩壊することがある。

世知原町的眼鏡橋は、谷が深いこともあって、橋高は高く、17橋の平均が 5.2 m である。北川内川が本流に合流する地点にある山



第3図 世知原町の集落と眼鏡橋

口橋の標高は5.2mある。^{いわい}祝橋は大正の初め、山口橋は大正の末に架けられた。祝橋は鎮守大明神、山口橋は山口神社を控えている。祝橋仮設時には松浦炭鉱から80円（総工費の19%）の寄附があった（写真3）。他は架橋位置に関連して岩谷口が47.6%を負担したのをはじめ、太田、長田代が負担をしている。また昭和に入っても岩下橋、前原橋、曲川橋の三つの眼鏡橋が架けられた。

世知原の眼鏡橋はすべて橋名がつけられている。高観寺橋、いずみ橋は同名の新しい橋

もある。しかし橋名の由来ははっきりしない。祝橋と倉淵橋は親柱に橋名があるので納得で



写真2 倉淵橋（世知原町）



写真3 祝橋架橋記念碑

きるが、橋名からその場所を理解することは容易でない。岩下、前原、曲川3橋の他には通地橋、奥ノ口橋が小字地名から、山口橋が神社名から命名している。また野田橋は屋敷橋で、野田氏の宅地にある小橋（長 2.7、幅 1.8、高 1.6 m）である。大正期に架けられた丑太郎橋も人命によると云うが真偽の程はわからない。

Ⅳ. その他の地域における眼鏡橋

(1) 長崎県本土北部

長崎県の眼鏡橋分布はまだ完全にわかったわけではない。少なくとも4～5橋は見落としかあろう。

吉井町は世知原町に隣接する。佐々川の谷が僅かに平地である他は丘陵山岳地域からなり、世知原町同様、炭鉱地域であった。最盛期には12鉱山があった吉井町では炭鉱跡地の活用として、御橋^{おはし}鉱跡に工業団地が造成された。この対岸には御橋観音が存在し、天然の石橋がアーチ状に架かっている。この種的眼鏡橋が佐世保市内北端の佐世保川と相浦川の分水界にある。

吉井町には人工のアーチ橋もある。松浦線最後の開通区間（1944年）潜滝～肥前吉井間

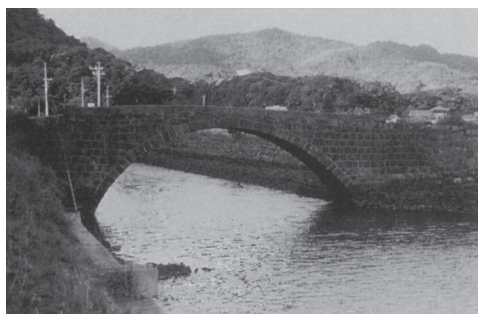


写真4 西川内橋（小佐々町）

の鉄道が、河川争奪で知られる福井川を跨ぐところに、コンクリートアーチ橋がある。なお、碓井峠（標高 1,180 m）の信越線の旧線に架かる鉄道橋はレンガ造りアーチ橋である⁵⁾が、波佐見町村木の国道高架橋はコンクリートの9連アーチ橋である。

佐々川右岸、小佐々川の河口付近は、江戸時代干拓地が幾つも出現した。小佐々町的眼鏡橋は小佐々浦の湾頭の干拓地と西川内とを結ぶ。ここは海と川が接するところで、大正9年（1920）7月架橋のその眼鏡橋は町の文化財となっている（写真4）。干拓地の堤防は道路にもなるので、佐々～黒石～西川内の県道が昭和3年（1928）開通するまでは幹線道路として大いに利用された。

鹿町町口ノ里免は江迎湾に面するが、山地が大部分を占める海に近い山村である。ここ

鹿町的眼鏡橋記念碑々文

昔から川向う西側集落住民は飛石でこの川を渡り雨が降ると飛石が渡れず、不便と危険な生活をしていた。耐えかねた住家12戸当時湯村作太郎氏を中心として話し合いを重ね村当局の助成を受け石橋を架けることになり、労力、資金を出し合せ現在の橋の位置に長さ 18 m 幅 3.2 m の立派な眼鏡橋が完成、集落としては大変な事業であった。集落住民の涙ぐましい協力一致の結晶であり、集落あげて完成を喜んだ。時に昭和2年4月。集落生活は一変して便利な日常生活となった。

昭和63年1月鹿町川河川工事のため橋の架替えとなり、近代的な現在の橋となった。橋の取り壊しの折りは集落集まってかがり火焚き、橋との別れを惜しんだ。

先祖の功績を賛えるため記念碑として石橋の両側4本の標柱を残し当時の眼鏡橋の面影を偲び名残りを止むものなり。

昭和63年4月 集落民一同



写真5 鹿町橋記念碑

にもかつて炭鉱が存在した。鹿町川は北流し江迎湾に入るがこの河口から約2 km 上ったところに太鼓橋と称された眼鏡橋がある。鹿町橋が正式の橋名である。この眼鏡橋は昭和2年(1927)5月に住民の熱望で架けられた。現在は同じ位置にコンクリート橋が架かっており、昔の太鼓橋を偲び記念碑と橋柱を残し、後世に伝えようとしている。記念碑には眼鏡橋は集落住民の涙ぐましい協力の結晶と述べている。長さ18 m、幅3.2 m の眼鏡橋は石材を上流の船石から鹿町炭鉱の台車で運んで、石工2人で工期40日で作った(碑文・写真5)。

(2) 佐賀県西部

佐賀県には古い石橋が少ない⁶⁾。佐賀平野(面積600 km²)のような軟弱地盤地域には不向きで、石橋は不等沈下の危険性が考えら

れる。

佐賀県下の眼鏡橋は背振山地に明治24年(1981)に架けられて以降、西部に幾つかみられる。この眼鏡橋も明治以降の架橋という。肥前半島の眼鏡橋の性格を示している。

藤津郡塩田町は温泉のある嬉野町に隣接し、波佐見焼、吉田焼、有田焼の窯業地に陶土を供給する。塩田町の石造眼鏡橋は鹿島川上流の谷所^{たにどころ}、八天神社の参道に架かる。橋長11 m、幅3.7 m、高さ4.6 mで、例外的に架橋年が古い。嘉永5年(1852)に着工され、同7年に完成した。谷所、石垣の集落の石工十数人が工事にあたったとされる。

鹿島市能古見^{のこみ}の厳橋は、明治27年(1894)、鹿島川の支流中川に架けられた長さ30.7 m、幅3.6 m、高さ4.2 mの橋である。厳橋より約500 m 下流の八千代橋は大正8年(1919)建設の二連拱橋の眼鏡橋で、長さ32 m、幅3.5 mである。祐徳稲荷境内にはミニ眼鏡橋がある。なお、小城郡の三岳寺橋は水害で流失した。

西松浦郡有田町の有田川を跨ぐ国道35号線に新眼鏡橋がある。初代は安政年間(1854～60)に、二代目は大正末(1926)、三代目は昭和43年(1968)の架橋である。有田皿山には橋がなく、文政11年(1828)8月9日の火災では大被害を受け、架橋の契機になったという。なお、初代の頃は太鼓橋で、焼物荷を車で運ぶのに苦勞している。波佐見町眼鏡橋には、有田の堅固な眼鏡橋技法が入っていると思える。

V. おわりに

長崎県の石造眼鏡橋とその地理的特性(地

理24の4、1979)を公表した時期(1979)には52橋までしか把握できなかった。全国の眼鏡橋については昭和58年(1983)859橋、同61年896橋という数字が山口祐造氏によって報じられている。ここでは長崎県に全国の8.9%にあたる80橋がある。しかし、波佐見町、世知原町の眼鏡橋42がどう扱われたかはわからない。

橋が道路の延長という認識はやっと始まったばかりで、研究はおろか橋梁台帳のような記録も不備で正確な把握もむずかしい。しかし、肥前半島の山村には橋ばかりか石垣(棚田)や石を使った溜池がある。自然と生活の中に文化は存在するが、石造の眼鏡橋のような石利用の文化がこれらの山村に及んでいく意味を大切にしていきたい。

波佐見町眼鏡橋

橋 名	所 在 地	長さ (m)	幅 (m)
	村木分校裏手	2.4	---
	村木分校裏手	1.6	5.9
	狸山下池下	1.85	3.0
	川内川水系	6.2	3.1
	川内川水系	3.6	2.85
	金屋下	4.85	3.0
	原田池下	2.75	3.4
	鬼木バス停前	2.8	2.8
	鬼木改善センター前	2.05	2.5
	観音堂下	3.2	3.7
	中尾入口	3.6	4.7
	中尾集落内	4.5	3.5
	中尾集落内	1.5	2.0
籠原橋		8.7	3.7
御堂橋		8.4	4.45
稗ノ尾橋	仏坂池下	3.2	3.7
		14.7	3.75
	永尾集落内	16.0	3.0
	三股川下流	17.6	2.75
	三股集落内	13.9	3.05
	野々川ダム上	12.5	2.3
宮ノ前橋		13.7	3.7
	熊野神社前	13.7	1.6
	田別当	14.0	2.45
	田別当	14.45	2.25

世知原町の眼鏡橋

橋 名	所在地	長さ (m)	幅 (m)
高観音寺橋	上ノ原	13.3	3.9
竜ノ氏橋	上ノ原	4.0	3.4
尾崎橋	檜巻	6.7	3.6
古山橋	上ノ原	9.7	3.6
通地橋	上ノ原	3.0	2.8
いずみ橋	栗迎	9.0	2.0
山口橋	栗迎	5.2	1.8
きりのき橋	北川内	5.7	3.5
倉淵橋	栗迎	20.6	4.6
いしばし	栗迎	8.9	3.2
奥ノ口	太田	3.4	1.7
いわい橋	岩谷口	16.3	4.0
岩下橋	岩谷口	5.7	3.8
前原橋	岩谷口	3.3	3.6
曲川橋	岩谷口	5.5	3.5
野田橋	長田代	2.7	1.8
丑太郎橋	長田代	5.3	1.8

〔付記〕研究に便宜を頂いた一瀬信雄氏(波佐見町)、岡村広法、船津英雄氏(世知原町)、末吉純次氏(北松南高校)、西山武人氏(佐賀北高校)に厚く感謝申し上げる。なお本研究の動機は、米倉二郎氏の喜寿出版「集落地理学の展開」(大明堂1987)に中国江南の眼鏡橋の写真を見つけたことにあった。最近島原半島では雲仙岳噴火に伴い水無川(島原市上木場)、湯江川(有明町川内)に眼鏡橋の存在が明らかになった。

注

- 市川信愛「やきもののふるさと波佐見町」、地理18-2、1973、107~114頁。
- 山口祐造『日本の石橋』、平凡社、1978。
- 近藤 忠「藩政時代の紀ノ川水運」、(『河谷の歴史地理』、1958、352頁所収)。
- 隈部 守「長崎県産炭地の衰退と人口減少」、立命館文学313、1971、47~65頁。
- 市川健夫『信州の峠』、第一法規出版、1973、扉写真 2 頁。
- 山口祐造『九州の石橋をたずねて 後編』、昭和堂、1976、95頁。